

# 産官学連携による造形ワークショップの実践とその効果 I

## A Study of the Effectiveness of Art Workshops on Collaboration by Industry-Government-Academia

河西 栄二

KASAI Eiji

キーワード：美術教育 産官学 造形ワークショップ 教材研究

### I はじめに

#### 1 概要

本稿は、産官学連携による造形ワークショップ<sup>1)</sup>の実践報告と、その実践の大学生への効果についてまとめたものである。

本造形ワークショップ事業は、(株)関ヶ原製作所<sup>2)</sup>が主催し『せきがはら人間村フォーラム造形教室』として2007年度より毎年行われている。初年度と第二回は企業の実施する単独事業であったが、第三回目となる2009年度より、岐阜大学教育学部美術教育講座彫塑研究室、関ヶ原町教育委員会、垂井町教育委員会も協力して実施する体制が整えられた。また、2010年度には、岐阜県教育文化財団、岐阜聖徳学園大学、金沢美術工芸大学も加わり、より充実した連携体制のもと、産官学が一体となり協力して運営を行うこととなった。

昨今では、公民館などの公共の場を利用した一日造形教室や工作教室などの、いわゆる造形ワークショップは、生涯教育の場として幼児、小学生から成人まで、さまざまな年齢層を対象に数多く行われている。

それらの多くは官(市町村、教育委員会、美術館、科学館などの公的機関)、あるいは学(大学など教育機関)が中心となり実施されることが多い。また、民間企業が行う場合には、それ自体が企業のサービス業としての収益事業であることがほとんどであるが、本事業は産(企業)が主導となり三者が関わりながら、しかもそれが企業にとって直接の収益目的ではないという点が珍しく、この取り組みの大きな特徴といえる。

(株)関ヶ原製作所は、こうした活動にも取り組む数少ない貴重な企業である。またその中で中心的な立場で企画を推進しているのが、(株)関ヶ原製作所内にある財団法人『せきがはら人間村』顧問の杉本準一郎氏<sup>3)</sup>である。氏は新制作協会<sup>4)</sup>彫刻部の会員で、優れた彫刻家でもある。

氏は、「会社とは単に労働するだけの場ではなく、人が生き生きと暮らすための基盤であって欲しい。」と言う。製作所が取り組む文化的な事業は、社員教育、社会貢献、社会奉仕という概念を超え、創造的な芸術活動を企業運営の基盤に据え、まちづくり、ひとつづくりを進めているといえよう。

#### 2 本事業に期待される大学生への効果

本事業は、企業、学校、教育委員会、大学、子ども、保護者、大学生など、それぞれの立場での効果があるわけだが、大学生への効果として期待する内容は以下の五点である。

##### ① 社会理解・責任

大学生活だけでは稀薄になりがちな社会との関わりを持ち、こうした文化的事業活動をする企業があり、それが企業や社会に大切な活動だと理解し、自分もその責任を果たす一員と自覚する。

##### ② 子ども理解

子どもと実際に関わる機会を増やし、子どもの造形の魅力を知る。

##### ③ 美術の楽しさの再確認

大学での美術実技の授業では、技術習得や表現の深さを目指すため、学生は美術の難しさを強く感じる傾向がある。

参加者と関わることで、楽しんで作る喜びを味わうことで、豊かな生活や、創造的に生きる力につながることを最確認する。また、それをまわりの人たちに伝えていく使命を自覚する。

#### ④ 美術教材への理解を深める

制作者の年齢や人数などの条件を考慮しながら教材を工夫して設定することの重要性を理解する。

#### ⑤ 美術と社会の関わりを実感する機会

美術の力を再確認し、そこに人や社会を変えていく力があると感じることができる。

これらのねらいを基に教材の設定や事前準備を含めた実施計画を杉本氏と共に検討した。

## II 実践1「粘土でつくろう大好きな人」

### 1 教材設定について

#### (1) 教材を選定するための基本事項

杉本氏が過去に企画・運営した、せきがはら人間村フォーラムの造形教室では、2007年に『どろ団子づくり』、2008年に粘土で『どろせんべい(座布団)づくり』<sup>5)</sup>を行っている。どちらも抽象的な形態の作成であり、上手い下手という意識を持ちにくいという利点がある。また、つつる、まんまるなどの目標が立てやすく、完成度の高い表現ができる。

2009年は、岐阜大学教育学部美術教育講座彫塑研究室も協力して造形ワークショップを実施することが2月に決定し、それ以降杉本氏と筆者は月に一度のペースで打ち合わせを行い、教材設定や実施の詳細について検討を進めた。

例年の規模や日程を踏まえた計画として、開催日時は小学生が夏休みに入り最初の土曜日とし、午前中制作してお昼を皆で食べ、製作所の工場内や彫刻広場などの見学をして解散すると決定した。

子どもの人数は百人から二百人程度、全体の進行は杉本氏が進め、会場設営、受付、昼食の準備などは、関ヶ原製作所の社員ボランティアの担当とした。サポートする指導者は、美術教育講座学生と関ヶ原製作所新入社員の担当とし、

子ども五人に指導者一人程度を想定すると、指導者は、合計二十～四十人程度必要であることが確認された。

また、教育委員会や関ヶ原町、垂井町の小学校校長会への説明は、杉本氏が行い、近隣の小学校へ造形ワークショップのチラシを配布することとなった。

#### (2) 教材内容とテーマ

教材内容について杉本氏から提案されたのは、『大切な人』というテーマで両親の顔を土粘土で作成し、それを製作所内で野焼き焼成するというものであった。

土粘土は可塑性に優れており、紙粘土に比べ、触り心地もよく重量感がある。年齢の低い子どもたちでも自由に形を作ることができるので、立体制作を行う造形ワークショップでは最適な材料といえる。

粘土の素材感や迫力を体全体で感じさせるために、一人2kgの粘土を用いることとした。

子どもの手にはあまるほどの量であり、ダイナミックに粘土の触感を味わいながら制作できる。

また、両親の顔、大切な人を作るというテーマ設定は、子どもたちが理解しやすく、納得して取り組めるものと考えられる。

#### (3) 教材内容の問題点の検討と対策

問題は、子どもたちの表現レベルが本テーマを作りきれない段階にあるのかという点と、焼成のために粘土の厚みを調整する方法をどうするのかという技術的な点であった。また、野焼きに必要な膨大な作業量と時間を処理できるかということも課題として残されていた。

一般的に造形ワークショップは、低学年から高学年までの異学年の小学生が混在し、一日限りで完成させる場合が多い。今回は兄弟の幼児も参加が予想され、一日制作であることから、制作における集中力の持続時間は一時間から二時間と想定した。

限られた時間の中で、低年齢層の子どもたちに粘土でレリーフ作品制作を行う場合、半立体にならずに平面の板に線描のみという表現が多くなることが予想される。

そこで、砂をつめたビニール袋(図1)を用

意し、それを粘土で包むことで、土台部分の半球上のふくらみをつくる技法を取り入れることとした。

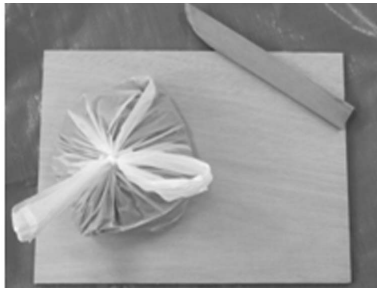


図1 教材 砂を詰めたビニール袋

ここに、目や鼻、口を線描やひも作り、あるいは凹凸などの各自の技量に合わせて自由にする、という表現なら低学年の子どものでも可能である。

また、800℃の素焼き焼成することで、粘土は非常に魅力的な素材感を持つ作品となる。

粘土の厚みが5cm以上ある部分は、焼成時に破裂したり割れたりするため、あらかじめ粘土作品を裏から削り、厚みを3cm～5cm以下に整える必要がある。この削る作業は、作品の表面が半乾きで、ある程度の強度を保持し、かつ裏面は生乾きで削りやすいという状態で作業することが重要である。

一日限りの造形ワークショップにおいて、裏から削る状態にすることは難しく、後日指導者のみで、削り作業をする場合も多いが、膨大な作業となる。

それが砂袋を使用することで削り作業は不要となり、制作翌日に裏から砂袋を破き取り除くことで厚み調整をスムーズに行うことができる。

砂袋の使用は、表現の面でも技法上の面でも効果的であると考え、この方法で学生による試作を行うこととした。

また、野焼きについて今回は見送ることとし、業者による焼成を杉本氏が手配することとした。

## 2 実施計画

具体的な実施日程は以下の通りである。

- ① 事前学習 4月11日 関ヶ原製作所見学
- ② 事前学習 5月26日 特別授業（講義・試作）

③ 事前学習 5月26日 交流会

④ 実践当日 8月1日



図2 事前学習 (株) 関ヶ原製作所見学  
製作所入口におおきな彫刻作品が設置されている。



図3 事前学習 (株) 関ヶ原製作所見学  
製作所入口の人間村フォーラムの看板

## 3 事前学習 関ヶ原製作所見学

2009年4月11日、学生を引率し、(株) 関ヶ原製作所の見学を実施した(図2, 図3)。7月31日の造形ワークショップ実施に向けて、学生に(株) 関ヶ原製作所がどのような企業なのか知ってもらうことが必要だと考えたからである。新年度のはじまったばかりの時期であったが、彫塑専攻の学生を中心に三年生五人、二年生一人が参加した。

見学日は、「せきがはら人間村花祭り」と題したフォーラムの開催日に合わせた。このフォーラムは、社員への文化事業を一般にも公開し毎年春に実施されているものであり、通年の文化事業<sup>6)</sup>のオープニングという位置付けとなっている。

今回は、エッセイスト伊吹和子氏<sup>7)</sup>の源氏

物語についての講演会，ギタリスト酒井康雄氏<sup>8)</sup>，ピアニスト伊藤仁美氏<sup>9)</sup>による『小さな花の音楽会』というミニコンサート，そしてオープニングパーティーという構成であった（図4，図5）。



図4 事前学習（株）関ヶ原製作所見学  
オープニングイベント開会式 杉本準一郎氏。



図5 事前学習（株）関ヶ原製作所見学  
オープニングイベント会場の様子

学生たちは，大きな工場を持つ企業の中でこうした文化事業を行っていることや企業の敷地内に数多くの彫刻作品が設置されていることに驚きながら，講演会やコンサート，軽食をとりながらのパーティーでの交流を楽しんだ。

このパーティーの場で学生たちは，杉本氏との会話を通して，（株）関ヶ原製作所の社員教育や文化事業への考えを知ることができた。また，造形ワークショップに向けてのイメージをもつこともできた。

彼らが大学にもどり，同級生や後輩にその様子を話してくれたこともあり，事前学習として5月に実施した特別授業には大勢の学生が集まった。

#### 4 事前学習 大学での特別授業

杉本氏による特別授業は，一年生の必修授業である教養セミナーの時間に設定した。2009年5月26日に岐阜大学の彫塑教室において90分の授業を実施した。

一年生10名に加えて，二年生，三年生在籍者24名中18名が希望して出席したため，総勢28名の学生が参加することとなった（図6）。



図6 事前学習 特別授業風景  
学生を前に講義を行う杉本氏

事前準備として筆者が土粘土（60kg），砂（20kg），ビニール袋，ヘラ，制作板などを用意した。

授業の90分間の内，最初の30分間を概要解説や美術教育についての講義にあて，残り60分間で『大好きなおとうさん，おかあさんをつくる，私のいちばん大切な人』というテーマによる土粘土での試作体験演習を行った。

##### （1）講義内容とその効果

杉本氏の30分の講義は，長い教師経験に裏付けられた説得力に満ちたものであった。それは以下の様な内容である。

##### ① 子どもと教師（指導者）の関わり方。

子どもとの距離を縮める，子どもの心に入り込むためには，上から目線ではなく，こどもの横に寄り添い話すと良い。

##### ② 美術の力，魅力

目を閉じても見えるもの（目を閉じても顔を押しと光の模様が見える。）とか，粘土は形を作るものだがたたいて音を出すこともできるなどのいろいろな発想が，美術・技術の領分であり無限の可能性を広げる。

##### ③ 制作の導入で子どもをやる気にさせるポイント。



上記の発想を持つことで、子どもは先生を好きになり、造形が好きになる。

粘土を練る、切る、などでも見せ方次第で子どもたちは、制作への気持ちが高まる。ダメ出しをしないで、いろいろやりたいという子どもの気持ちを認めながら、アドバイスしていく。

まずは教えるのではなく、一緒にやってみるという気持ちが大切。

#### ④ 企業のありかた。社会人の生きがい。

会社は金もうけだけの場所ではない。仕事をするところだが、それ以外の何か、『生きがい』を得られるところであるべき。子どもたちも親の必死で働く姿や場所を見る機会が必要である。

この30分の講義で、杉本氏の人柄や思想に触れ、子ども理解や美術教材のありかた、企業のありかたや生きがいなどについて、学生たちの中で大きな意識改革がなされた。それが彼らの記した感想から見て取れる。

「子ども達との接し方など、私が考えていたものとは全然違うものだったので生かしていきたいと思います。」

「とても興味深かったです。自分も作品のできあしよりも子どもたちの気持ちを大切にしたい授業を行いたいと思っているのでとても参考になりました。」

「子どもには「～しないといけない」とか「がんばれ」とか、強要するような言葉をかけるといけないということがわかった。」

「子どもへの目線の重要さを知りました。一つ一つの行動へのおもしろさを見つけていくことの大切さも知りました。」

「企業で芸術活動をする大切さがわかった。子どもに接する姿勢を工夫している杉本さんを見て私もトライアル<sup>10)</sup>（岐阜大学教育学部一年生時の教育実習）などのときはいろいろ工夫しようと思う。」

「彫刻家ということで専門的な難しい話なのかと思ったら全然違って子どもとの関わりから会社のこと、粘土とのふれあいかなどいろんな話をわかりやすくしゃべって下さって、とても面白かったです。」

「子どもたちと話をする時には、励まそうと

することよりも、一緒に共同作業をすることで子どもたちと共感していくことが大事なのだと思います。また粘土の形やたたいたときの音とか、粘土自体のおもしろさを、作っているときに声をかけたりして制作を楽しめたらいいと思った。」

「お金のためではない活動は素晴らしいと思いました。「こうしたい」「自分の伝えたいこと」を大切に制作したいです。」

講義を受けた学生たちは、造形活動における子どもへのかかわり方を考え直していた。それは、うまく作る方法や技術を教えるのが大切なのではなく、子どもたちが粘土に触り形をつくることを楽しみながら生き生きと過ごすことをサポートするのが自分たちの役割だ。ということである。

通常の大学の授業や実習では、学生たちに知識や技能の習得をさせることが優先され、このような意識改革の時間をもつことは難しい。今回の成果は、外部講師による特別授業の効果ともいえるが、杉本氏の教師としての経験に基づく内容や思想が学生に自然に受け入れられたといえよう。

#### (2) 演習（試作体験）とその効果

後半60分間の演習では、実践当日の指導ポイントを理解するために試作を行った。

杉本氏の導入は、まず20kgの土粘土を両手で叩き大きな音を出し、学生が驚いている時に、このように音でも表現できる、と教え、さらに粘土を舐めて見せることで、土粘土が安全な素材であることを伝えると同時に、見ている学生の気持ちを自分の導入に引き込んでいった。

さらに20kgの塊のまま、荒練り、菊練りと行い、粘土を取り分ける場合の工夫として、らせん状に曲げた針金で、粘土を波型の模様に分けた（図7）。この場面に感心した学生も多く、次のような感想を記している。

「粘土を取り分けるときにねじれた針金で波々にするのは面白い。機会があれば子どもたち相手にやってみたいです。」「波々に感動」「あのぐねぐねの粘土を切る針金で心をつかむというのは参考になった。」「杉本さんの粘土を練る姿がかっこよかった。」「導入が大切だと実感しました。」

造形活動に入る前の導入では、子どもたちの心をつかむ力、技量や仕掛けや熱意が重要だということを多くの学生が感じていた。

筆者は、専任の教員として専門教科の指導を行っているが、日々の授業の導入や実演は学生の教育においても重要であることを再認識した。

その後には杉本氏は、切り分けた粘土を板状にしてから砂袋の上ののせ叩いて丸めるところまで実演し、その後自由に目や鼻を作るという解説をした。

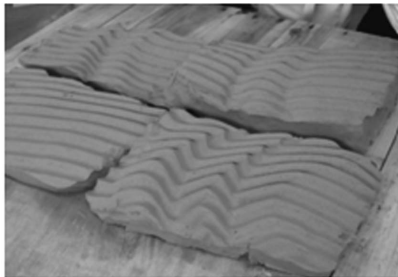


図7 波状の模様に分けられた土粘土



図8 特別授業風景 試作の様子

そこから各自の制作(図8)がはじまり、実質30分程度の制作時間であったため、「時間が足りなかった。」という感想を持った学生も多かったが、小学生低学年の児童が1時間程度で制作する教材の試作ということを考えると妥当な時間配分といえよう。

制作結果を見てみると、半立体の球状の土台に線描やひも作りの粘土を貼り付けて、眉毛や目、鼻、口を観念的にイメージのみで作るものとなった。

筆者は、大学二年生の小学校教科の授業『図工』の中で、90分授業を4回用いて土粘土による自刻像レリーフの制作を指導している。鏡を用いて対象をよく見てつくることを重視し、奥

行き関係やそれぞれのパーツの量の方向性、面の向きを意識するように声掛けしている。今回の試作制作に参加している三年生8人は、すでに体験している授業である。

しかし、その三年生の試作を見ても、一、二年生のもも表現レベルに大きな違いはなく、彫刻としての形態の魅力、量感や奥行き意識はあまり見られなかった。

これは、制作時間が少なかったこと、杉本氏の講義の中で自由に楽しく作る、と聞いたこと、また造形ワークショップでの指導対象が幼児から小学生であり、中学生が対象ではないことなどが理由と思われるが、一方では、自由に、楽しく、という言葉が、簡単に、一生懸命にならずに、という理解につながったといえよう。

「図工Iのレリーフより自由にできました。楽しかったです。」「大切な人の顔を制作していたのに、だんだん面白い顔をつくってしまい楽しんでしまいました。でも久しぶりに自由に作れたので良かったと思います。」

これらの感想からは、通常の授業では自由には作れない、楽しめない、という学生の気持ちが読み取れる。美術作品制作という意識とは切り離し、友人とのコミュニケーションとして土粘土での表現を楽しんだともいえるだろう。

大学での美術専門の授業の中で、何を学ぶのか、子どもの作品制作において重要なことは楽しむこと以外には何なのか、など、学生にどのような美術教育観を持たせるのかが今後の筆者の課題となった。

砂袋を心材に使うことに関しては、学生たちも膨らんだかたちが簡単に作れる有効な方法だと実感していた。「土台の砂は意外と少なくとも大丈夫だと思いました。」「小さな子どもでも簡単に同じ粘土の厚さで作る方法がわかった。」といった感想からも、制作のコツをつかんだことが分かる。

この講義・演習の中で、学生からの提案も挙がった。それは、「『おとうさん、おかあさんの顔をつくる。』という言葉を除いたほうが良い。その理由は、片親の子どもや、親との関係が複雑な子への配慮ということと、テーマによる制約が少ないほうがのびのびと制作できるの

ではないか。」というものであった。この意見を踏まえ、杉本氏の判断により、『おとうさん、おかあさん』という言葉ははずし、『大好きな人をつくる』というテーマに変更することとなった。

これらの体験を通して、教材内容への学生の理解を十分深めることができた。

## 5 事前学習 3 交流会

### (1) 交流会とその効果

特別授業の後に学生たちの手料理による交流会を実施した(図9)。杉本氏や社員の方たちと気軽に話ができ、打ち解けることができた。(株)関ヶ原製作所主任で若手の中心となって活動を進めている三人の社員の方たちにも来て頂けたことで、大変有意義な時間となった。会話の内容は、造形ワークショップの話題にとどまらず、学生の作品制作のことや就職についてなど幅広いものであった。

社員の方たちの気さくな会話を通して学生たちは、「始めてあった感じがしない。」「将来の進路のことなど考える機会となった。」「ワークショップが楽しみだ。」などの感想を述べていた。

また新年度がはじまり2か月という時期でもあり、新入生と上級生の交流の場としても意義のある時間となった。



図9 交流会の様子

## 6 実践当日

### (1) 実施概要

実践方法 および実施時期

- (1) 日時 2009年8月1日(土)9:30~13:00
- (2) 場所 (株)関ヶ原製作所社員食堂
- (3) 参加者 子ども(幼児,小学生)136名,  
保護者約120名,

### (4) スタッフ 指導者

指導役の学生25名,指導役の新入社員15名,  
運営スタッフの社員約20名。

美術教育を学ぶ大学一年生から三年生を中心に希望者を募った結果、35名中25名が参加することとなった。自主的な参加であるにもかかわらず、これだけ多くの参加者がいた理由は、杉本氏や企画内容の魅力と事前学習の成果だといえるだろう。

当日は朝7時に大学から公用車のマイクロバスにて出発し、8時30に現地に到着した。天気はあいにくの雨だったが、社員食堂を会場に使用し、すでにテーブルが片づけられ、ブルーシートが会場全体に敷き詰められている。

はじめに社員の方とのあいさつ、顔合わせを行い、すぐに、用具の準備などをおこなった。

制作は12班に分かれ(図10)、班ごとに小学生10名とその兄弟2~3名と保護者、指導者として大学生2~3名、新入社員1~2名を配置した。

9時頃から受付を開始し、開始時間の9時30分には、140名近い子どもたちとその保護者、そして学生や社員を合わせると総勢300名近くの人が集まり会場は熱気に包まれた(図11)。



図10 実践当日 班の形態



図11 実践当日 導入の様子  
大勢の人で会場は熱気に包まれた



## (2) 導入

全体の進行は杉本氏が務め、あいさつの後の導入で実演を行った。それは、①貝をつくる。②海をつくる。③山を作る。④大きな顔を見せる。という物語としての流れを持たせたものであった。

最初に行った貝を作る、とは、大量の粘土による菊練りの様子を見せる内容であった。粘土を一気に練り、「何かが生まれるぞ。」と子どもたちの関心を引きつけ、アンモナイトに見立てた粘土の塊を示した(図12)。粘土を練る様子やその柔らかさを子どもたちは、自然に理解していく。

「次に海をつくります。」と話してから、大学での特別授業でも学生たちの前で行ったように、らせん状の針金で粘土の板をスライスして波をつくった(図14)。子どもたちから初めの緊張はすっかり消え、杉本氏の話に夢中になり一斉に周りに集まりのぞき込んでいた(図13)。

次に、あらかじめ準備した高さ90cm程度の板状の粘土(図15)を見せ、「山があります。エベレストです。アンモナイトが海から山にやってきました。」という物語を話し、粘土を2kg程度に切り分け数人の子どもに手渡す。

粘土の板が山状に立ててあるので、切り分ける様子が遠くからでもよくわかる。



図12 菊練りの模様でアンモナイト



図13 杉本氏の様子をのぞきこむ子供たち



図14 波型に切られた粘土を海に例える



図15 粘土の山『エベレスト』

子どもたちの、粘土に触ってみたい、作ってみたい、という気持ちが一気に膨れ上がっていく。

ここで最後に布をめくり、隠しておいた積層された段ボールで作った巨大な顔を見せ(図16)、「今日は、大好きな人の顔をつくります。」と制作内容を伝える。何を作るのか知らせるだけなら原寸大の粘土で作った見本でも良いのだろうが、長さが1 m20cm、高さ60cm近い顔は、迫力があり、圧倒される。子どもたちは、その周りに集まり、目や頬、鼻などを撫でてまわる。

制作の前に、素材の特性や制作内容を理解させるのだが、ワークショップという場では、情報の伝達のみではなく、こうした盛り上げ方が成功の鍵といえる。



図16 段ボールで作られた顔のレリーフ



導入に関する学生の感想は、「貝をつくり、海をつくり、エベレストをつくって…と、毎回子どもの興味を引き付ける作り方をしている、すごく参考になりました。段ボールで作った顔は感動しました。あの作品で子どもの興味がMAXになったので、すごく上手な引き付け方をされるな、と思いました。」

「子どもたちにやる気・興味をださせることの難しさを知りました。わかりやすく説明することの大切さが分かりました。」

「とても参考になった、自分もこんな授業の進め方をしてみたい。」

杉本氏の子どもたちを惹きつける導入の様子には、多くの学生が感じ入ったことがわかる。

### (3) 制作 粘土練り

気持ちが高まった子どもたちは、グループにもどり、指導者から粘土を受け取り練り始める(図17)。2kgの土粘土の塊は子どもたちには扱いきれない大きさであり、塊のままでは練ることは難しいが、体全体で粘土に挑むこと自体を楽しんでいた。よく練られた買いたての土粘土なので、練らなくてもすぐに使えるが、自分で練りながら、素材を体感する行為がとても大切だといえる。中には、学生に促されて粘土を足で踏んで練る子どももいた(図18)。



図17 土粘土を分けてもらう子どもたち



図18 足で練る



図19 砂袋を包む

子どもが粘土を練る様子から、学生たちは次のような感想を記した。

「子どもたちは、手の平が小さいのでうまく体重をかけることができないので、足でふみつぶして粘土をこねていました。一所懸命な姿がかわいらしかったです。」

「力が弱いので粘土練りが難しそうだったので、そんなときの粘土の練りかたなど、もっと指導に工夫をしていきたい。」

低学年での粘土練りは、少量で体重をかけて練ることがポイントとなる。さらに幼児では「へびをつくりましょう。」などの声掛けをして、ひも作りをして、それを折りたたみ、再度ひもをつくるという行為を繰り返すことで均一な柔らかさに練ることができるのだが、学生にそうした子どもへの練り方の基本が、定着していないことが確認された。大学での塑像実習などでも、子どもたちとの関わりを想定し、足で練ったり、ひも作りをしたりするなどの内容にも実際に取り組みせることを今後は計画していきたい。

### (4) 制作 子どもの表現

砂袋に粘土をかぶせ、顔のパーツを作る制作は、どのグループも順調に進んだようである(図19~27)。

制作する子どもたちとの関わりについて、学生の感想は以下のような内容であった。

「皆それぞれ違っていておもしろい造形ができていたように思う。」

「個性が出ていて、うまいなあ、発想がすごいなあ、と思うものもありました。」

「子どもの発想力にはおどろきました。角が生えていたり、顔にあばたがあったり、やわらかいアイデアで参考になりました。」

「子どもの作る作品には独創性があり、制作する姿は悩むというより楽しく思いついたことをそのまま反映させていて、うらやましく思いました。教える立場でしたが、子どもたちが勝手に進めていってくれるので、やることなく困ってしまいました。」

これらの感想からは、子どもたちの伸び伸びとした表現に触れた感動が伝わってくる。



図20 制作の様子



図21 制作の様子



図22 制作の様子

学生の中には子どもとの接し方や指導方法に課題意識を持つ者もあった。

「砂袋の使い方や、顔のつくりかたをどう説明しようか迷ってしまいました。これからはもっと教える技量を身に着けたいです。」

「何をどう作って良いか考えがまとまらない子もいて集中力も切れていて、どうしていいかわかりませんでした。」

言葉かけや指導のポイントの理解が不足していたと感じた者もいた。

「どこまでアドバイスしていいのか迷いましたが、子どもが楽しく表現していたので「いいよ、いいよ」とほめて作品づくりの意欲を高めるようにしました。」

「子どもにアドバイスをする時に、たぶん言ってもわからないだろうと思っていたことを実際に話してみると、きちんと理解してくれたので、子どもの理解力や判断力は予想以上に優れているのだとわかりました。今日は今まで気づかなかった子どもの良さに気付くことができてとても勉強になりました。」

「図工が苦手そうな様子の子どもや、静かな子は親が結構手を出していて妙にうまくまとまっていました。うまくできてはいましたが、やは

り子どもが作りきったものの方が面白いし、元気のある作品にできあがっていました。それを見ているだけで楽しくなりました。」

これらの感想からは、子どもが自ら工夫した表現に、魅力や価値を見出していることが読み取れる。



図23 制作の様子



図24 制作の様子



図25 出来上がった作品

#### (5) 保護者とのかわり

学生たちは、学部のカリキュラムであるアクトプラン<sup>10)</sup> (一年生から四年生まで通して行う教育実習プラン) や他の造形ワークショップへの参加などで子どもとの関わりは、比較的豊富である。

しかし今回の造形ワークショップでは、子どもの数も、100名以上と大人数であり、その保護者も一緒に制作することが特筆すべき点であった。

「親さんたちと話すことができたのが新鮮でした。僕たちは実習などに行き、子どもたちとは接するのですが、親さんたちと話を擦る機会はほとんどありません。なので、ある意味では未知の世界だったように感じます。実際に親さんたちの意見が聞けて嬉しかったです。」

「子どもたちと触れ合える機会は多いのです

が、親さんたちが一緒のパターンはあまりなかったもので、とてもためになる話を聞くことができました。こうしてたくさんの方が一堂に会するということがあまりなかったのもとても新鮮な気持ちでワークショップに臨めました。」

「子どももとても楽しんで一生懸命顔を作っていました。親御さんも夢中で制作していたのが印象的でした。」

「向かい合ってお互いの顔をつくっている親子がいて、良いなあと思いました。」

「制作を通してやりとりされる家族のほほえましい会話を聞くことができ、心に残りました。」

「こう作らなくてはいけない、という強制ではなく、あくまで人間関係づくり、人と人との結びつきを深めることの大切さ、喜びを実感することができました。」

学生たちは、家族で共に過ごす時間の大切さや、大人も作ることを楽しむのだということを、改めて感じる機会となった。

子どもの自主的な造形力育成ということだけを考えれば、保護者から離れて制作する方が良いが、親子で夢中になって同じ制作に取り組むことも、本事業の意義といえる。

学生たちにとっては、そのような関わりを見届ける機会をもてたこと、また彼らがボランティアや指導者という立場で、企業の方たちや保護者と交流できたことは、大学内では得られない貴重な経験であったらう。

### Ⅲ 研究成果と今後の課題

#### (1) 成果

本実践における学生への効果として期待した内容については、おおむね達成できたと考える。以下に項目ごとに成果をまとめた。

##### ① 社会理解・責任

保護者や社員の方との関わりを通して、責任ある言動への自覚が高まった。

自身のコミュニケーション力への課題意識を持った。

製作所の社員の方々との交流が今後の進路を具体的に見つめ直す機会となった。



図26 作品を眺める子どもたち

##### ② 子ども理解

子どもの独創性や発想力に驚きながら、伸び伸びとした表現力に出会い子どもの表現力や実践力を見直した。

制作過程で指導方法に迷いながらも子どもの気持ちに共感しながら子どもの意欲を伸ばすことを学んだ。

子どもの年齢や性格に合わせた、より良い関わり方や指導方法を求める向上心が見られた。

##### ③ 美術の楽しさの再確認

思いついたことを迷いなく作ろうとする表現の強さや、不器用でも作りきったものの面白さなどの、造形の本質を再確認できた。

自分がそれを制作や指導を通して周りの人へ発信することが今後の課題といえる。

##### ④ 美術教材への理解を深める

教材を試作し、指導することで具体的な制作手順や指導法を知った。また導入での伝えかた、見せ方が大切だと実感した。

##### ⑤ 美術と社会の関わりを実感する機会

企業の方や保護者や子どもたちや学生が、つくる喜びを共有できたことが大きな成果だといえる。

美術に興味を持ったり、体験することが、生活の中での活力となりえることに気付いた。

#### (2) 課題

今回指導する中で、自由に楽しくということが優先され、子どもの表現を高める導きや、やる気を促す働きかけが弱かったともいえる。

また教材設定や事前準備、運営に学生たちが主体的に関わることが望ましいが、時間や場所などの制約もあった。

子どもにも片付けを一緒にさせたほうが良い。



(という意見は学生から挙げられた。)

#### IV まとめ

造形ワークショップを産官学共同で実施することで役割分担ができ、それぞれの目的にあった取り組みができた。

筆者や学生たちの主な役割は、美術教育の指導者として教材研究する事と、子どもへの指導であり、それに集中して取り組むことができた。

会場設置や受付、昼食の準備、完成作品の管理などの膨大な仕事は、(株)関ヶ原製作所の方々に担当いただき、そして杉本氏の卓越した理念と行動力により密度の濃い内容となった。

造形ワークショップは、異学年の集団が一日限りの関わりの中で作品を数時間で完成させなければならない。

学校教育とは違い、作る楽しさの体験や場のエネルギーを体感するという美術の経験が求められる。

そこでは短時間につくるための周到な準備が必要である。またその短い時間内に、子どもたちに本気で制作に向かってもらうために、やる気を引き出すインパクトのある導入が不可欠である。小学校の図工に必要とされる系統立てや、まんべんなく様々な能力を育てる教育とは異なり、教材はそうした場にふさわしい要素を持つものを選ぶ必要がある。

造形ワークショップの体験は、小学校での基礎基本の学習に上積みされるべきものである。指導者は、学校教育での造形活動との違いを意識し、それぞれの特徴が生かされる指導を行わなくてはならない。両者を体験することで、子どもたちの造形活動は、より豊かなものになるといえよう。

ワークショップでも学校でも子どもの造形の魅力を短時間で引き出すためには、指導者自身の制作経験に裏付けられた表現力が欠かせない。子どもの制作の中にある美術の本質を見失わないためには、学生自身の制作とその表現力の深まり、及び専門知識習得が重要である。

今後は、学生がこうした理解を持ちながら表

現力を高める制作実習に取り組めるよう、大学での授業内容や学生との関わりかた、教育内容や方法の見直しにつなげていきたい。

また引き続き2010年度に取り組んだ実践については、次稿にて報告するつもりである。



図27 制作後の記念撮影の様子

#### 謝辞

貴重な機会を与えていただいた関ヶ原製作所の皆様、そして杉本準一郎氏に改めてお礼を申しあげます。

#### 註

- 1) ワークショップの定義として、中野民雄は、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して、共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と示している。『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』(2001) 岩波新書p10
- 2) (株)関ヶ原製作所を中心とするセキガハラグループは、経営事業以外の社会的責任を果たすことを目的とし、ギターコンサート、講演会、彫刻シンポジウム、彫刻庭園竣工、公園整備などの文化活動を継続して行ってきたが、2009年度にはそれら文化活動の母体として財団法人「せきがはら人間村」を立ち上げた。
- 3) 杉本準一郎(すぎもとじゅんいちろう)氏は、1948年信楽生まれの彫刻家である。金沢美術工芸大学美術学部彫刻科卒業、新制作協会会員、1971年より愛知県常滑高校窯業科教諭として務めながら、国内外の彫刻シンポジウムなどで活躍する。2006年に関ヶ原製作所内にスギモトオープンエアミュージアムという野外彫刻庭園が造られる。2008年に高校教諭を早期退職し、関ヶ原製作所内



- の財団法人「せきがはら人間村」顧問に就任した。
- 4) 美術公募団体展の一つ、1936年に猪熊、小磯ら7名により協会が創立された。「反アカデミック芸術精神に於て官展に関与せず、我々は独自の芸術的行動の自覚に於て我々の背馳すると認めたる一切の美術展に関与せず」という主張をかかげて新制作派協会の結成を声明した。  
1939年には本郷、山内（壯夫）、吉田（芳夫）、舟越、佐藤（忠良）、柳原、明田川の7名によって彫刻部が設けられた。2010年には、第73回展が国立新美術館（東京 六本木）で開催された。
  - 5) 乾燥、焼成を行い、一か月後に再度集まり、各自の作った「どろせんべい（座布団）」に座り、歌や踊りを楽しむという夏祭りを実施している。
  - 6) 2009年の年間プログラムは、以下の通りである。  
4月オープニング、せきがはら人間村花祭り(講演会、コンサート、パーティー)、5月スポーツフェスティバル、6月人間村講座、8月せきがはら人間村こどもの日（造形委教室）、8月夏祭り、9月技能シンポジウム、技能競技大会、10月文化交流サロン、11月フェスティバル2009、ひろばつくり20周年記念事業、清塚ミュージアム完成披露、12月能力開発大会、フィナーレ餅つき大会、ピアノコンサート
  - 7) 伊吹和子氏は、1926年京都生まれ、京都大学文学部文学部国文学研究室勤務を経て、谷崎潤一郎「新譚源氏物語」の口述筆記をきっかけに中央公論社に入社。
  - 8) 名古屋芸術大学ギター講師。中部日本ギター協会会長。
  - 9) 桐朋学園大学ピアノ科卒業後、全国でのソロリサイタルや執筆活動などで活躍。杉本氏と同じく、せきがはら人間村顧問に就任している。
  - 10) アクトプランとは、岐阜大学教育学部の大学1年生から4年生までの系統立てた、教育実習（教職トライアル、教職リサーチ、教職プラクティス、教職インターン）のことを指す。  
1年生の教職トライアル（必修）は、附属小中学校において、観察実習（小学校2日、中学校2日の参観と大学での講義）を行う。2年生の教職インターン（必修）は、岐阜市内小学校1週間、中学校1週間の参加型実習、3年生の教職プラクティス（必修）が、いわゆる教育実習であり、岐阜県内の指定校において小学校4週間、中学校4週間の実習を行う。  
4年生の教職インターン（選択）は、県内の指定校（小、又は中）に毎週一日半年間通い、授業補

助や学校整備などの様々な取り組みを行う実習である。

#### 写真出典

図1～27 筆者撮影

